

三郷村・住吉庄開拓の歴史

平成21年4月

金井 恂

## 目 次

- 1 はじめに
  - 2 弥生時代の遺跡
    2. 1 安曇郡における弥生時代
    2. 2 黒沢川右岸遺跡
    2. 3 石戈と安曇氏族のつながり
    2. 4 黒沢川右岸遺跡の広がり
    2. 5 その後の状況と空白の期間
    2. 6 安曇の他地域の状況
  - 3 安曇郡の成立と高家郷の位置
  - 4 住吉庄の成立年代
    4. 1 文献史に登場する住吉庄
    4. 2 住吉庄成立時代の推測
  - 5 住吉庄成立の前段階と空白の期間
    5. 1 湧水による原始的な水田耕作
    5. 2 原始的な水田耕作の時代はいつか
    5. 3 原始的な水田耕作に利用された用水はどこか
    5. 4 黒沢川の氾濫の年代とその後
  - 6 堰の開削と住吉庄開拓の歴史
    6. 1 住吉庄開拓における第1段階、原始耕作のはじまり
    6. 2 住吉庄開拓における第2段階、用水路の延長
    6. 3 住吉庄開拓における第3段階、用水堰の開削
    6. 4 住吉庄成立における第4段階、天皇家への寄進
  - 7 三角原遺跡発掘情報による庄野堰と長尾堰の開削年代
  - 8 堰の開削者
    8. 1 外部からきて開拓することは困難
    8. 2 堰の開削者
  - 9 住吉庄の範囲と経済的中心地
  - 10 住吉神社の縁起
  - 11 諏訪下社、穂高神社との関係
  - 12 まとめ
- 添付資料

## 1 はじめに

住吉庄は平安時代から室町時代にかけて旧三郷村・旧豊科町等の安曇郡南部地域に存在した18郷村から成る寄進地系荘園である。住吉庄開拓の歴史は安曇郡の古代史を考える上で、非常に重要な要素である。

旧三郷村（以降三郷村と称す）の黒沢川右岸遺跡は弥生時代中期中葉のものであり、そこには高度な弥生文化を有する弥生人たちが居住しており、周辺の先住民である縄文人たちと融合して共存していたことが分かっている。しかし、三郷村地域ではその後続く集落址や遺跡・遺物が発掘されないまま数百年が経過している。そしてようやく、平安時代中期の三角原遺跡等の大きな集落址が発掘されている。また文献史料もほとんどない。そのため弥生時代以降から平安時代前期までの数百年間においては、三郷村地域・住吉庄地域は居住する人のいない空白の状態であったといわれている。『三郷村誌Ⅱ』は、この空白だったとする考えに立って、三郷村の歴史を論じている。安曇平、とりわけ三郷村地域・住吉庄地域は扇状地中腹にあり、用水が無いため開拓の困難な地域であり、そのため黒沢川右岸遺跡の弥生人たちはどこかに移住してしまい、無人の空白地域となったという考えに基づいたものである。

しかしこの説には大きな疑問がある。三郷村地域には平安時代中期に住吉庄という大きな集落が存在していたのである。すると、空白地域に突如として住吉庄という大きな集落が成立したことになる。このようなことは考え難いことである。松本地域に大きな勢力を張った有力者が突如として大挙して進出してきて開発したといわれているが、そのようなことは考えられない。平安時代の頃、松本から遠く離れた用水のない不毛の原野を開発しようと乗り出してくる動機は考えられないからである。

すると次のような仮説が考えられる。弥生時代に黒沢川右岸遺跡周辺に定着した弥生人たちはその後、さまざまな困難に直面しながらもこの地にしがみついて、営々と開拓し続けてきた。そして彼等は数百年かかって徐々に勢力を拡大し、住吉庄を成立するまで成長したと考えられる。住吉庄は突如として誕生したのではなくて、成立の前段階として住吉庄地域の開拓期間があった。つまり三郷村地域は無人の空白地域ではなく、継続する歴史があったとする考えである。本稿においては、この観点から三郷村地域および住吉庄の開拓の歴史を詳しく見てみることにする。

## 2 弥生時代の遺跡

### 2. 1 安曇郡における弥生時代

日本列島に人類がやってきたのは約2万年前頃である。その後彼等は日本列島に定住し、1万2千年前頃から2千3百年前頃の縄文文化と呼ばれる文化を育て、縄文人と呼ばれている。そして紀元前300年頃に水稻栽培技術を持つ新たな人々が大陸から日本列島の北九州地域に渡来してきた。この渡来人たちはその後急速に日本列島を東方へ進出していった。初期には先住民である縄文人を駆逐して進出したが、その後は共存し混血融和しつつ

進出していった。これらの人々を弥生人と呼び、その時代を弥生時代としている。この年代は紀元前300年頃から紀元後300年頃とされている。弥生人が信濃国へ進出してきたのは弥生時代中頃、紀元前100年頃とされている。そして安曇郡へ進出してきたのは、安曇平の弥生時代遺跡の存在から、その少し後の弥生時代中期中葉の頃、つまり紀元元年頃と考えられる。

安曇郡においては弥生時代遺跡・遺物の発掘は少ないために、安曇郡の当時の状況を明確にすることは困難である。とはいえ発掘された遺跡・遺物は少ないけれど、重要な遺跡が幾つもある。私たちはそれらの少ない情報を的確に把握し、そして合理的な推論を加えることによって、安曇郡の弥生時代の状況を理解するべく考察しなければならない。ここでは住吉庄の成立過程を調べることに着目し、まず三郷村地域の遺跡について見ることにする。

## 2. 2 黒沢川右岸遺跡

黒沢川右岸遺跡は黒沢川右岸の長幸園（特別養護老人ホーム）が在る場所にある。遺跡は1988年（昭和63年）に三郷村教育委員会によって発掘調査された。調査範囲は約50m×80m位の狭い場所であり、調査結果は『黒沢川右岸遺跡』（1988.3、三郷村教育委員会）として報告されている。それによって遺跡の特徴を列記してみる。

縄文時代住居址が2軒、弥生時代住居址が2軒発掘された。報告書ではこれらの住居址が同時代のものであったかどうかについては触れていないけれど、住居址が10m程度の近くに隣接して発掘されている状況から、住居は同時代に存在しており、弥生人と縄文人とが協調し共存していたと考えられる。

この点について『三郷村誌Ⅱ』は次の二つを指摘している。まず縄文の住居址と弥生の住居址は類似性が高いとし、「これらの地面に残された特徴が縄文時代と共通することから、屋根を中心とする上屋の構造もほぼ同じであったと考えられる。つまり、新しい文化が及んでも、家は伝統的な建て方を守って造られ続けていることが分かる」（歴史編p45）と述べている。つぎに土器について、「壺につけられた文様は、まさに縄文土器に施文した旧来のものをそのまま使っている。器の新しい機能を受け入れながら、伝統の装飾を用いるという見事な文化融合が行われているのである」（同p46）と述べている。

この地において弥生人と縄文人たちとが共存していたということは、その後の歴史を考える上で非常に重要な意味をもっている。この地域および安曇郡には先住民としての縄文人たちが多数居住していたのであるが、その縄文人たちは速やかに弥生文化を吸収し、その結果、安曇全体は急速に弥生化していったと推測することができるのである。

出土した弥生土器片は考古学的所見によって弥生時代中期中葉から後半のものと判断されている。黒沢川右岸遺跡は安曇郡における弥生時代の遺跡のなかで最も古いものとされている。なお、旧明科町の緑ヶ丘遺跡は出土品の内容が黒沢川右岸遺跡のものと類似しており、遺跡の時代区分も同じ頃とされている。

出土遺物の中に靱痕の付いた土器片や石包丁がある。石包丁は稲の穂を刈り取る農具とされている。これらから、当時水稲栽培が行われていたことが分かる。ただし水田がどこにあったのかは明確にされていないが、黒沢川の河川湿地帯にあったと推測される。

出土品のなかに土製紡錘車そして底部に目の細かい布の圧痕が付いた土器片がある。これらからこの弥生人たちは高度な紡織技能をもっていたことが分かる。

さらに出土したさまざまな石器のなかに、石戈（せつか）がある。『三郷村誌Ⅱ』によると「大陸から伝わった青銅製の武器に銅戈（どうか）がある。それをまねて作られており、粘板岩をていねいに磨き、銅戈に施される穴や溝まで忠実に模倣している。おそらく実用品というより、祭器或いは宝器として意味があり、この武器をもつことで権威などが示されたのであろう」（歴史編 p 47）とし、さらに「前述した磨製石戈の出土は、黒沢川のほとりのムラに、その権威を示す石製の剣を持つ有力者が存在したことを強く予感させる」と述べている。つまり黒沢川右岸遺跡に定住した弥生人たちの中に相当に有力な族長がおり、彼はこの地に移住してくる以前において、すでに大陸文化に接し、その中で銅戈による権威を得ていたと考えられるのである。（添付資料参照）

### 2. 3 石戈と安曇氏族のつながり

この石戈は貴重な遺物ということだけでなく、非常に重要な情報を提供しているのである。著名な考古学者である大場磐雄博士は、安曇氏族は弥生時代に糸魚川から姫川沿いに遡上して安曇郡へ進出してきたと主張した。その根拠としたものは北安曇郡平村海ノ口上諏訪社に銅戈が存在することである。詳細は省くが、大場博士はこの銅戈は安曇氏族の存在を示す証拠であるとしたのである。しかし、この銅戈は出土地が不明であり、この神社の祠官が越後国西頸城方面から持参したのではないかといわれており、そのためこの説は他の研究者たちを説得することができなかった。

大場博士は黒沢川右岸遺跡発掘の時にはすでに逝去しており、石戈の出土を知ることはできなかった。もし、大場博士が存命でありこの石戈の存在を知ったなら、黒沢川右岸遺跡地域に定住した弥生人は安曇氏族であったと主張したと思う。

### 2. 4 黒沢川右岸遺跡の広がり

黒沢川右岸遺跡の東側約 1.2 km の地域に堂原遺跡がある。ここは三郷村上長尾部落であり、平福寺を中心とした地域である。『三郷村誌』（旧版）によると、「弥生時代中期からしばらく空間があるけれど連続と続く歴史の地域である」、そして土器、石器類は黒沢川右岸遺跡のものと同じであると述べている。すると、黒沢川右岸遺跡の弥生人たちがこの地に移動してきたと推測できる。

つぎに、黒沢川右岸遺跡から北東へ約 2.5 km の地域に大きな集落址である三角原遺跡がある。ここは黒沢川が伏流してしまう位置のすぐ下流であり、黒沢川の洪水が起こる場合には直ちに氾濫に見舞われる場所である。そのような場所に、なぜ大きな集落ができたの

か不思議である。この遺跡は9世紀中ごろから11世紀中ごろまでのあいだ営まれた集落遺跡である。興味深いことは、この遺跡の北の端で弥生時代の土杭が1基発掘されたことである。発掘箇所が調査地域の北の端であることから、調査範囲をもっと広げたなら、もっと多くの弥生時代の土杭やその他の遺物が発掘されたかもしれない。とはいえ1基だけであっても、弥生人の存在が確認できるのである。おそらく黒沢川右岸遺跡の弥生人たちがここにも広がっていたと考えられる。

こうしてみると黒沢川右岸遺跡に定住した弥生人たちは、そこにじっと定住していたのではなく、居住や水稻栽培に適した地域を求めて周辺へどんどん広がっていったと考えられる。そして周辺地域において弥生人たちはかなりの大人数に増大したと推測することもできる。また前述したように、黒沢川右岸遺跡においては弥生人と縄文人が共存・協調して生活していたのである。つまり、安曇の山麓沿いに先住していた多数の縄文人たちは黒沢川右岸周辺の弥生人たちと交流しており、一部の縄文人たちは弥生人集落の隣に移住して、共存し融和していたと考えられる。こうして安曇人が誕生し、水稻栽培、紡織技能、弥生土器等の弥生文化は急速に縄文人たちの中に浸透し、安曇平全体にも波及していったと推測できる。

## 2. 5 その後の状況と空白の期間

黒沢川右岸遺跡地域に定着し、堂原遺跡地域等周辺へ広がった弥生人たちは、その後その痕跡が途絶えてしまう。つまりこれらの遺跡のその後の存続の痕跡が見つからないのである。三郷村・豊科町周辺の安曇郡南部においては弥生時代に続く古墳時代・奈良時代の遺跡遺物は非常に少ない。

こうした状況から、安曇郡南部においては弥生時代のあとから平安時代中ごろまでは集落は存在しなかったと言われている。つまり空白の時代だったとされている。百瀬新治氏は「国府の対岸—信濃国安曇郡南部における古代集落の変遷—」（『長野県立歴史館研究紀要』第11号、2005年3月）なる論考を著し、安曇郡南部においては「穂高町以外では、遺物の散布等は認められるものの、明確に9世紀初頭までさかのぼる集落は存在しない。わずかに三郷村黒沢川付近でその可能性を指摘できるが、一定の規模で安定的に営まれてはいない」と述べている。また『三郷村誌Ⅱ』も、「安曇の西山山麓から扇状地一帯は、弥生時代後期から終末以後、生活の痕跡はきわめて少なくなる。中略。三郷の地は、ほぼ無人の野に戻ってしまった」（歴史編 p 45）とし、そして「黒沢川右岸遺跡に始まる弥生文化が周囲の黒沢川沿いの扇状地や段丘を下がった堂原遺跡で見られた。しかし、これらの遺跡が弥生時代の後期に途絶えてからは、古墳時代から奈良、平安時代の初めまで、集落は途絶えて空白域となるのである。その後、村内平坦部で検出されている平安時代の遺構まで、実に4、5百年間という永い期間にわたって遺構の検出はなく、三郷村一帯は、無人の荒野となっていたことが推定されるのである。」（歴史編 p 77）と述べている。

弥生時代のあと平安時代までの遺跡遺物がきわめて僅かしか発掘されていないことは事

実であるが、しかしその間は本当に居住者が存在しない「4, 5百年間の空白の期間」だったのだろうか？ ここには幾つもの疑問がある。もしもそうだとすると、黒沢川右岸遺跡周辺に定着していた弥生人たちはどこへ行ってしまったのか？ そして当時、周辺地域にいた先住の縄文人たちは弥生文化を吸収し、弥生人と融和していたと考えられるのであるが、その安曇人たちや縄文人たちもどこかへ行ってしまったのだろうか？ さらに平安時代に存在した集落は突如として、外部から植木を移植するようにして、発生したのだろうか？ 三郷村が当時無人の荒野だったすれば、そのような地域に大きな集落が突然発生することはあり得ないのではないか？

ただし『三郷村誌Ⅱ』は別の箇所では、「遺物では、平福寺周辺の堂原遺跡、その東側の栗の木下遺跡、そして住吉神社西側の三角原遺跡の三遺跡で、この時期より古く奈良時代にさかのぼる可能性のある須恵器が少量出土している。いずれも住居で日常に用いられた器の破片であり、これらの諸遺跡では、激動の九世紀後半以前に小規模の集落が展開していたと考えたい」（歴史編 p 61）と記述している。この食い違いは、表現における微妙なニュアンスの違いに過ぎないとも思えるのであるが、しかし重要な指摘である。

「4, 5百年間の空白の期間」があったかどうかという問題は、三郷村・住吉庄開拓の歴史の急所であり、本稿の最大の課題である。これから詳しく検証することにする。

## 2. 6 安曇の他地域の状況

安曇郡の他の地域の状況を見てみる。まず穂高地域においては、弥生時代の遺跡として、三枚橋遺跡、他谷遺跡、宮脇遺跡、南原遺跡、馬場街道遺跡等が知られている。これらの遺跡は黒沢川右岸遺跡よりも後の時代のものである。続いて古墳時代においては五輪畑遺跡、馬場街道遺跡、宮地遺跡、藤塚遺跡等が知られている。また穂高古墳群と呼ばれる百基近い古墳が存在している。奈良・平安時代の遺跡としても馬場街道遺跡、五輪畑遺跡、宮地遺跡、八ツ口遺跡等がある。これらの遺跡は、穂高地域においては弥生時代中期以降継続的に人々が居住し生活していたことを示している。発掘調査によって穂高地域においては烏川がしばしば氾濫していたことが分かっており、その結果として遺跡遺物は地面の下に埋まっている。ことに穂高神社境内においては地下約 12mの所から弥生時代の土器が出土している。なお、穂高地域は安曇郡の八原郷のあった地域である

豊科地域においては弥生時代の遺跡は町田遺跡のみである。ただし、町田遺跡は犀川の東側にあり、地理的にかけ離れた場所にある。弥生時代中期後半の遺跡とされており、水稻栽培や畑作栽培に関連する多数の出土品がある。また多数の住居址と掘立柱式住居址が発掘されている。しかし町田遺跡集落は短期間継続したのみで、その後洪水によって埋没し消滅した。その後において復活した痕跡はない。奈良・平安時代の遺跡として、吉野町遺跡があり、多数の住居址が発掘されている。豊科地域においては弥生時代以降人々が継続的に居住していた痕跡は見つかっていない。

明科地域においては弥生時代遺跡として、緑ヶ丘遺跡、ほうろく屋敷遺跡等がある。緑

ヶ丘遺跡は弥生時代中期とされており、出土品内容は黒沢川右岸遺跡出土品と類似しているとのことである。古墳時代の遺跡として、上生野遺跡、潮神明宮前遺跡、栄町遺跡、北村遺跡等があり、古墳としても潮古墳群、お経塚古墳等がある。奈良・平安時代の遺跡としてほうろく屋敷遺跡、上手屋敷遺跡、北村遺跡、潮神明宮前遺跡、明科廃寺等がある。これらは弥生時代以降人々が継続的に居住し生活していたことを示している。

池田町地域においては弥生時代遺跡として滝の台遺跡がある。これは弥生時代後期のもので、多数の住居址が発掘されている。古墳時代の遺跡として鬼の釜古墳がある。池田町地域においては弥生時代以降の遺跡が継続しており、人々が継続的に居住し生活していたことが知られている。なお、池田町は安曇郡の前科郷のあった地域である。

大町市南部の社地域には弥生時代遺跡として、古城遺跡、中城原遺跡等々がある。これは弥生時代中期ないし後期のものであり、多数の住居址および土器類が発掘されている。この地域には弥生時代以降の遺跡が継続してあり、人々が継続して居住し生活していたことが分かっている。なお、この地域は池田町と隣接しており、安曇郡の前科郷の一部だったと思われる。

大町市北部の木崎湖から農具川沿いの地域には借馬遺跡、来見原遺跡等がある。これらは弥生時代中期ないし後期の遺跡である。この遺跡集落はその後ずっと継続して営まれ、規模は中信地方最大級の大きさである。この地域には平東部古墳群、小熊山古墳群がある。小熊山古墳は積石塚古墳である。積石塚古墳は朝鮮からの渡来人系の墳墓とされており安曇郡の中ではここだけであり、この地域の特異性を示している。なお、この地域は安曇郡の村上郷のあった地域である。

以上が弥生時代以降平安時代にかけての、安曇郡の概略状況である。これらの情報から安曇郡の中で、三郷村・豊科町周辺を除いた地域においては弥生時代以降の遺跡遺物が多数存在しており、人々が継続して居住していたことが分かる。すると先の「4, 5百年間の空白の期間」説によると、安曇郡の中で南部地域である三郷村・豊科町周辺地域だけが空白地域となっていたということになる。

黒沢川右岸遺跡は、安曇郡の中で弥生人が進出してきた最初の場所である。そしてそこにおいて縄文人たちと共存生活をしていたのである。その人々が消えてしまったとは到底考えられない。どこかへ移って行ったのか、或いは住み着いていたけれど、その遺跡遺物を発見できないだけのことと考えるのである。この観点からさらに考察を進めていくことにする。

### 3 安曇郡の成立と高家郷の位置

安曇郡の存在が明確になるのは正倉院御物の調布の記述によってである。その記述は「信濃国安曇郡前科郷戸主安曇部真羊調布壺端」とあり、次に「郡司 主帳従七位上 安曇部百鳥」とあり、さらに「天平宝字八年十月」とある。このことから、天平宝字八年（西暦764年）当時においては、安曇郡が成立していたことそして安曇部（あずみべ）が郡の役人

(郡司 主帳)であったことが分かる。この事実から安曇郡が成立した年代を判断することはできないが、このときにはすでに安曇郡は成立していたのであり、成立時期はもっとずっと以前であると理解できる。

平安時代に書かれた『倭名類聚』によると安曇郡は高家郷、八原郷、前科郷、村上郷の4郷である。これまで高家郷は、島内地区の小宮・犬甘島・平瀬一帯と真々部・飯田・小海渡・熊倉・中曾根を中心とした安曇郡南部一帯と考えられてきた。

これに対し、この地域には古墳時代、奈良時代における集落遺跡が発見されていないことから、山田真一氏が平成14年に「安曇郡南部の集落は、高家郷に比定するのは難しい」と指摘したこと、さらに明科廃寺の発掘調査が進んだことから、高家郷は明科を中心とする地域だったという説が提出されている。『三郷村誌Ⅱ』は、高家郷明科説として桐原健氏の「明科廃寺が提起する問題」(『信濃』54-12)と題する論文を紹介している。また百瀬新治氏は「国府の対岸—信濃国安曇郡南部における古代集落の変遷—」において高家郷明科説を主張している。

これらの論考を読むと、高家郷は明科に在ったとする説は、安曇郡南部が空白の地域であったという認識に強く基づいていることが分かる。その点で、三郷村・住吉庄の歴史を調べる立場として非常に興味深い問題である。

高家郷明科説は注目すべき説と言えるが、しかしまだ解明すべき疑問点が幾つか残っている。弥生時代から古墳・奈良時代にかけて明科地域にかなり大きな勢力が存在したことは確かであるが、明科地域は安曇郡と犀川によって分離された場所であり、地理的には辺鄙な場所である。高家郷明科説では明科が高家郷の政治的中心だったとしているが、このような僻地にあえて政治の中心を置く必要性があったのだろうか？ この犀川は水量が多く、流速も早い川である。流れのゆるい河であればともかくとして、そのような犀川を渡ることは容易ではなかったと思う。古代においては農業と支配は一体であり、行政と経済とは分業できていなかった。そのような時代において高家郷でなされた政治とは一体どのようなものだったのだろうか。現在の町役場のようなものを想定することは見当違いなことである。

また安曇郡の郡司には安曇氏族がおり、高家郷地域の支配者も安曇氏族だったと推測され、そして明科廃寺を建立したのも安曇氏族だったと推測されている。すると明科廃寺を建立して仏教を崇拝し、さらに穂高神社を創建して穂高見命を祀っていたことになる。建立の時代ははっきりしないが、諸説によれば明科廃寺の方が建立時代は古い。神仏の両方を崇拝することはあり得ないことではないが、その事情はどのようなものだったのだろうか？

さらに明科は東山道の道筋ではないことを指摘したい。東山道は古くにおいては、伊那の高遠から杖突峠、大門峠を越えて上田盆地へ入り、入山峠(旧碓氷峠)を越えて上野国・下野国へ通じるものだった。その後、伊那谷ないし木曾谷を北上して善知鳥峠を越えて松本平に入り、錦織から保福寺峠を越えて上田盆地へ入り、さらに入山峠(碓氷峠)を越え

て上野・下野国へ入るルートが開かれた。これらが東山道といわれているのであるが、これは松本の犬甘郷から錦織郷へ入り、麻績郷へ行く道順であり、明科は道筋から外れている。

また信濃国から越国へ向かう道として、一志茂樹氏（「信濃と越を結ぶ古代の幹路」『信濃』第15巻第10号昭和38年）によると、古くにおいては松本平から明科付近を通り麻績郷へ入りそして善光寺平へ抜ける道があったとのことである。そしてその後保福寺峠越えの東山道が開かれてからは、越国へ向かう道順は松本平の犬甘郷から錦織郷へ入り、次いで麻績郷を通して善光寺平へ抜けるようになったとのことである。

こうしてみると明科町は東山道の道筋に在ったことはなかった。また越国へ向かう路の道筋としても、保福寺峠越えの東山道ルートが開けるまででありそれ以降は道筋から遠く外れてしまったのである。

これまで多くの学者・研究者は、高家郷の位置は島内・豊科地域を中心とする場所だったと述べてきているが、考古学的史料が少なく詳しい考察がなされておらず、説得力に乏しいものであった。一方、高家郷明科説は有力な説と思えるのであるが、しかし前述したような幾つもの疑問があり、いまの段階では素直には納得できない。今後の調査研究を期待したい。

#### 4 住吉庄成立の年代

##### 4. 1 文献史に登場する住吉庄

「安曇郡」は奈良時代中頃（764年）に歴史に登場するが、「住吉庄」が歴史に登場するのはそれよりもずっと後の平安時代末期である。

一志茂樹氏は「住吉庄の成立過程」『信濃』（第4巻第7・8合併号、昭和27年）において文献史料を詳細に調査し、住吉庄の成立時期を調べている。それによると、安曇郡地方が荘園領地化していった際、はじめに住吉庄ができ、遅くとも平安時代末期までに全郡地域が荘園化した。住吉庄が文献に現れるのは吾妻鏡文治2年（1186年）の条がはじめてであり、このときは後院領（後白河法皇の荘園）であった。その後住吉庄は長講堂領（後白河法皇が御所の六条殿のうちにつくった持仏堂＝長講堂）に変わっている。そして文献史的には、野原庄（北安曇郡池田町および松川村・会染村の一部）との関連からみて、住吉庄は保元（1156～1158年）の頃には後院領に入っていたと考えられるとしている。つまり文献史料から考えると、住吉庄成立は保元以前のことでありとしている。

住吉庄に関する文献史料は非常に少なく、成立年代や範囲についてはあいまいな状況であるが、一志茂樹氏は穂高神社および諏訪神社の造営日記類を調査して、住吉庄の全貌を推測している。それによると、住吉庄とは三郷村を中心とし、旧梓川村・倭村・豊科町の一部を含んだ地域であり、飯田、熊倉、中曾根、中萱、戸間、氷室、大妻内宮高、唐笠木、成合、楡、久木、二木、及木、角懸、杏、長尾、寺所、間々部の18の郷村地域である。[\(添付資料参照\)](#)

#### 4. 2 住吉庄成立の年代推測

一志茂樹氏によると、住吉庄の政所だったと思われる上長尾部落に、住吉庄の祈願寺と推考される平福寺があり、「その本尊（観音堂安置）木造聖観音立像が藤原時代末期（筆者注 11 世紀後半）をややのぼったころの造頭にかかるものと認められる」とのことである。ただし、『三郷村誌Ⅱ』によるとこの本尊は「鎌倉時代初期（12 世紀～13 世紀初頭）の作（歴史編 p 103）とある。

そして平福寺は長徳年中（995～997 年）に建立されたという伝承があるとのことである。また明盛村一日市場に長徳寺址があり、この寺は長徳年間の創建と伝えられているとのことである。一志茂樹氏はこの二つの寺の存在は、住吉庄が成立する以前においてこの地域に大きな勢力があったことを示していると指摘している。10 世紀後半には平福寺や長徳寺を建立するための経済力と労働力がこの地域に育っていたのである。

一志茂樹氏はこれらの事情から推測して、住吉庄成立は「藤原時代の中期から末期にいたる間において成立したと見るのが穏当な推測ではないかと考える」としている。つまり平安時代中期（1000～1100 年）頃を下る頃、すなわち 11 世紀後半から 12 世紀前半にかけての頃に成立したと推察しているのである。

これに対し、『三郷村誌Ⅱ』は、「平安時代末期（12 世紀末）には成立していたと考えられる」（歴史編 p 88）としている。しかしこの見解は、12 世紀末には成立していたということであり、住吉庄としての成立の時点はもっと以前であったということの意味している。結局、住吉庄成立は、一志茂樹氏の考察に基づいて 11 世紀後半から 12 世紀前半にかけての頃とすることが妥当と考えられる。

住吉庄地域は天皇家に寄進されて住吉庄荘園となった。つまり天皇家に寄進されるに値する水田地域に開拓されてから、寄進されたのである。この地域において安曇人たちは多くの犠牲を払い、血と汗を流しながら営々と開拓し続け、そして 12 世紀はじめ頃において寄進するに値する荘園を開拓した。住吉庄成立の前段階というべき長い開拓期間があったのである。このことは三郷村地域において「4, 5 百年間の空白の期間」はなかったということを示唆している。そこで住吉庄成立の前段階期間の状況をさらに詳細に検証する。

### 5 住吉庄成立の前段階と空白の期間

#### 5. 1 湧水による原始的な水田耕作

小穴喜一氏は雑誌『信濃』（第 4 巻 第 7,8 合併号、昭和 27 年）に「長尾堰・庄野堰の開鑿を中心とした住吉庄の開拓」と題する論文を掲載している。住吉庄は平安時代の中期頃に成立したと考えられてきたが、それを明らかにする文献史料はなにもなかった。そこで、現地踏査を行いこの地域の用水網の詳細な分布図を作成し、さらに水田耕土の深さに関する耕土分布図を作成し、それらを基に長尾堰・庄野堰の開削を中心として住吉庄の開拓経緯の考察をおこなった。その結果、住吉庄ことに三郷村地域の古代から中世にかけての状況が非常に明確になった。

小穴喜一氏によると、旧明盛村長尾部落の城下田圃、住吉部落と小田多井部落の間にある水田そして旧温村下長尾部落の六反田地籍から二木部落の柳田地籍を経て楡部落の前田・屋敷ぞへ地籍に続く地域の三地域は耕土深さが 100 c m の農耕に適した土地である。この地域では過去に、楡部落の甕八重人・石曾根喜佐一両氏宅地から土師器（弥生時代以降の古墳時代から奈良時代にかけて使用された土器）が出土し、また下長尾部落の中村太郎氏畑地から須恵器（古墳時代後期に朝鮮から伝えられたもので、1200℃位で焼かれた陶質土器）が出土している。六反田地籍で発掘された土師器類は地下 75 c m の深さにあり、そこは黒沢川の氾濫による堆積土層であった。これらのことから土師器使用の時代にこの地域に居住者がいたことが分かった。なお長尾部落の城下田圃は弥生時代の堂原遺跡に隣接する場所である。

さらに小穴喜一氏は三郷村の用水堰を実地踏査して、長尾部落の城下田圃に面した段丘下に水出という湧水があり、如何なる旱魃の時にも湧水が絶えなかったという伝承があり、そしてこの湧水地点は丁度 100 c m 耕土地帯と接していると指摘した。この湧水および扇状地表面を流れ下ってくる自然流は段丘下の溝に集められて用水路（筆者注：長尾堰の原型となったと推測される）となり、長尾の城下田圃、六反田地籍、柳田地籍の飲用水および水田用水として利用されていたと考えた。そしてこの用水路の灌漑地域にのみ 150 坪内外の古田が存在することそして土師器・須恵器はこの用水路の周辺地域のみに多数出土していることを見出している。こうしてこの地域において土師器使用の時代に原始的水田耕作が行われていたことを見出したのである。

この用水路の下流域の及木部落に及木遺跡（後日、道下遺跡と呼ばれる）がある。この遺跡からは土師器の小片が出土しており、土師器使用の時代の遺跡と考えてよい。「及木遺跡調査概報」（『信濃』第 4 巻 第 7, 8 合併号、昭和 27 年 藤沢宗平、中田令夫）によると、出土した土器片は土師器の小片であり出土数が少ないため、年代は「甚だしく頼りないが、平安時代も若干下がってのころに比定したい」と述べている。また『三郷村誌Ⅱ』は掘立柱建物跡の構造から「中世前半に属するものではないか」（歴史編 p66）とし、「少なくとも中世前期には、現在の楡と及木の間集落が存在していたことが明確になった」（同 p66）と述べている。掘立柱式建物の目的は不明とのことであるが、多数の柱穴跡があり、その規模はかなり大きいものである。こうした状況から考えると、この時代すなわち中世前半において及木遺跡集落はかなり大きな規模だったと推測できる。つまり、この集落は中世前半よりもかなり以前からこの地域に定着して勢力を拡大してきていたと推測することができる。そして及木遺跡周辺で行なわれていた原始的水田耕作は中世よりかなり古くから行われていたと推測できる。

小穴喜一氏は及木遺跡に関して次のように考察している。「おそらく土師器使用時代は自然流・湧水に依存し、その後の氾濫において一時住居は消滅したが、その後再び生活が行われ、かあめが長尾堰の流末としてここに引水されたのではなかろうか」。つまり、土師器使用の時代において堰は存在せず自然流・湧水に頼った原始的水田耕作が行われていた。

その後、黒沢川の氾濫があり、氾濫土壌中に埋もれてしまった。しかしその後再び人々が定着し、水田耕作が始められ、やがて長尾堰（段丘下の湧水を水源とする用水路）の流末がこの地域に到達した。そしてかつての自然流の呼び名がかあめであったので、この流末はかあめ堰と呼ばれたのではないかというのである。

こうして小穴喜一氏は、土師器使用の時代において湧水および自然流を用いた用水路が長尾部落付近から二木部落、楡部落を通過して及木部落まで通じており、耕土 100 cm の良好な耕土地帯で古代人が原始的な水田耕作を行い居住していたことを見出したのである。それらは住吉庄成立以前の時代の状況である。

この知見は現地を実地に歩くことによって得られるものであり、考古学上の発見というものではないが客観的事実であり、この地域の開発経緯を明らかにする上では非常に重要な発見である。考古学や文献史学からは決して得られない貴重な歴史史料なのである。一志茂樹氏は小穴喜一氏の論考に対し、「その考察は、形態的究明に重点をおき、あくまで実証的で、しかも科学的であって、郷土史研究の得て陥り易い憶測や独断に少しも捉われておらず、その内容は文献史的研究の欠陥を埋める補助的考察といふよりは、むしろそれに対比できる独自の世界をもっているものといっても過言ではない」（「住吉庄成立の過程」より）と述べている。さらに及木遺跡と用水堰かあめに関連して、「この箇所は用水堰「かあめ」を外にしては水田の灌漑は不可能の地域であり、しかも遺跡時代の生活地面にはいまだかあめは通じておらず、黒沢の自然流を認めることによってのみ考定されるのであるから、たとへ、一個の遺跡の出現とはいへ、中略、重要な「隅の捨石」の役割を示すものといふべきであろう」とし、「ささやかな一つの遺跡でも、歴史究明の最も重要な一つの鍵となり得る一面のあることを、今後の考古学はその研究の埒のうちに、重くとりあげてゆくべきだと考える」とし、最大級の賛辞を述べている。

## 5. 2 原始的な水田耕作の時代はいつか

小穴喜一氏は、原始的な水田耕作は「上古の時代」、「土師器使用の時代」という認識と「住吉庄成立前の時代」という認識を述べているが、それが具体的にいつの時代かについては記述していない。しかし前述したように黒沢の氾濫以前から行われていたと考えているのであるから、おそらく弥生時代以降の古墳時代のころを想定していたと推測する。なお、黒沢の氾濫がいつの時代に起こったかについては次節で考察する。一志茂樹氏も同様に、道下遺跡集落の時代よりも古い時代から自然集落が営まれており、それが住吉庄成立以前の状況だったと考えている。

なお小穴喜一氏は『三郷村の成り立ち』（小穴喜一、三郷村教育委員会、平成 8 年 3 月）の中で、長尾・二木・楡・及木等において土師器・須恵器時代に黒沢の沢水によって自然集落が誕生していたと述べ、続いて「（黒沢川）沢口付近にアルプス学園前古墳があるのも、古代開発の頂点に当時の支配者を埋葬したものと想定され、古墳の存在は、それ以後この地域の地表は不動であったことを実証している」（p 21）と述べている。現在では、三郷村

に古墳は存在しないということが考古学研究者たちの間では定説となっており、アルプス学園前古墳があったと言うことは誤解である。しかしこの記述は、小穴喜一氏が原始的な水田耕作の時代は弥生時代ないし古墳時代から行われていたという認識をもっていたことを明確に示している。

『三郷村誌Ⅱ』は前述の『三郷村の成り立ち』（同上）を主要参考本としたとして、原始的な水田耕作時代について、「稲作は、弥生時代中期に黒沢川右岸やチンクラ屋敷ですでに始められていたが、長尾・二木・楡・及木などで水田耕作が始められたのは、出土する土師器や須恵器により、九世紀の中ごろ（筆者注：平安時代前期頃）からである」（同歴史編 p 115）と述べている。つまり湧水と自然流による長尾・及木等の原始的な水田耕作は「4, 5百年の空白の期間」の後で発生したとしている。その根拠はなにも示していないけれども、9世紀までは空白の無人地帯だったという説が先入観念となっているように思える。この原始的な水田耕作年代に関する認識は小穴喜一の認識と大きく食い違っている。

この見解によると、9世紀の中頃に外部から誰かが入植して開拓したことになる。住吉神社の西側に隣接する三角原遺跡集落は9世紀中頃から始まったことが分かっている。すると無人地帯だった三郷村地域において、鉄器を使用する先進技術を有した三角原遺跡の開拓集団がおり、そしてこれとは別に長尾・二木・楡・及木などに入植して原始的な水田耕作をはじめた開拓集団がいたことになる。つまり三郷村地域に同時期に、しかも隣接するような近い場所に別々の集団が入植してきたことになる。そのようなことは不合理といわざるを得ない。

また土師器使用の時代を9世紀中頃から以降であるとする根拠はなにもない。土師器は弥生土器のあとの古墳時代から奈良時代にかけて使われていた土器であることを考慮すると、この地域における原始的な水田耕作は古墳時代に始まっていたと考えても何等差し支えないのである。従って長尾・二木・楡・及木等の原始的な水田耕作は弥生時代から古墳時代そして奈良時代においてなされていたと考えるべきである。

『三郷村誌Ⅱ』は別の箇所、「平安時代の土師器・須恵器を伴う平福寺を中心とした堂原遺跡、古代から中世の土器を伴う上長尾の上総屋敷遺跡や下長尾の栗の木下遺跡、黒沢川河床が認められた楡道下遺跡、そのほか三柱神社遺跡、楡の上手・小路・中村などの遺跡は、50センチ以上の耕土帯に所在し、いずれも黒沢川の沢水により先行開発されたことを物語っている」（同 p110）と述べている。ここでは、平安時代の堂原遺跡などは黒沢川の沢水によって先行開発されたというのであるが、この先行開発はいつの時代のことなのか不明であるが、文面からは平安時代以前ということが読み取れる。するとこの地域の開発は奈良時代か古墳時代から始まっていたと言うことになる。これは前述の「九世紀の中ごろ」とする記述および「4, 5百年の空白の期間」があったと言う説と矛盾することになる。

さらに別の箇所「長尾城址の段丘下に水出という湧水があり、小倉官林が開墾され、黒沢川扇状地の森林がすべて畑地化しても、なお地下水が湧出していた。古代においては

かなりの量の地下水を得られたであろう」(同歴史編 p 116)とも記述している。これは「水出の湧水」によって原始的な水田耕作が行われたということを示唆しているのであり、前述の「黒沢川の沢水により先行開発された」(同 p110)とする考えとも、湧水と沢水の点で微妙に食い違っている。

このように『三郷村誌Ⅱ』は時代考証の点で不整合な認識が多く見られる。その原因は、「4, 5百年の空白の期間」があったということ的前提にしているために、小穴喜一氏が見出した原始的な水田耕作の時代をこの空白の期間の後の状況として捉えていることにある。つまり、原始的な水田耕作は弥生時代ないし古墳時代から行われていたと考えることが合理的であり、「4, 5百年の空白の期間」ではなかったということを示している。

### 5. 3 原始的な水田耕作に利用された用水はどこか

一志茂樹氏は原始的な水田耕作と用水に関連し小穴喜一氏の論考を補強して次のように述べている。「現在、南安曇郡の南部と中部の平坦地帯は長野県のウクライナといはれているほど、米産地帯として知られているが、これらの地域のうち、梓川と犀川の沿辺をはずれた大部分の土地は、網の目のように縦横に走っている用水堰によって開拓されてきたところで、一自然流も一つの湧水もなく、しかも地下水は深く、川中島地方と若干似た環境である。もし、ここから用水堰を除いたならば、一坪の水田もできず、一滴の飲用水も得られないほど、この地域の聚落は用水堰に依存して成立しているのである」(住吉庄成立の過程)より)としている。

住吉庄が荘園としての規模に成長するためには、梓川から取水した堰を開削しなければならなかった。しかし、原始的な水田農耕は用水堰を開削してから始まったのではなく、堰の開削以前に湧水と自然水を利用して始まったと考えることが道理である。原始的な水田農耕に利用された水田用水はどこにあったのか明らかにすると、原始的な水田耕作の時代を推測する重要な手がかりとなる。

小穴喜一氏は「長尾部落の城下田圃に面した段丘下に水出という湧水」と「扇状地の表面を流れる自然流」そして「黒沢の自然流」という3つを指摘している。論考の中でしばしば「黒沢の自然流と湧水」と表現している。従ってあたかも「黒沢の自然流」があり、さらに「湧水」があったかのごとき表現となっている。しかし「黒沢の自然流」とは何か、いつの時代のものか、そして原始的な水田耕作とどのように関連していたのかという点についてなにも記述していない。本稿では「黒沢の自然流」とは黒沢川から流れ出した支流と理解し、湧水と扇状地の表層水とは別物と考えることにする。

その後小穴喜一氏は『三郷村の成り立ち』(同上)の中で「胴合から沢尻地籍は、中略、沢尻地籍までは常時沢水が流下し、それ以下では伏流して現在は枯れ沢である。沢尻地籍では、河床と周囲の畑地面とは同一平面上にあり、この地点を中心に長尾・二木・楡・及木へ向かって、かつてラッパ状に放流していたと推考される」(p 11)としている。この黒沢の自然流の根拠として、「六反田地籍より温明小学校の方向へ向かう自然流の跡」、「目下

新築中の瑞穂中学校に発見された地下70厘の自然流跡、「西及木・楡部落のハサミ」（「長尾堰・庄野堰の開鑿を中心とした住吉庄の開拓」）、「道下遺跡の堅穴の南の自然流跡」（『三郷村の成り立ち』 p 15）を指摘している。

しかしこれらは黒沢川が氾濫した跡であることは理解できるとしても、何時の時代のことなのか不明である。この放流域は黒沢川右岸遺跡がある地域であり、弥生時代における放流域だったとは考え難い。するとこの放流路は弥生時代よりもずっと以前の縄文時代のことと考える方が妥当と思える。

またこの流域における原始的な水田耕作の根拠となる土師器および古田等の存在は不明であり、黒沢の自然流によって原始的な水田耕作がなされていたということにはならない。

さらに「黒沢川扇状地上の長尾・二木・楡・住吉・及木・中萱等には、かつて扇頂の胴合地籍を要に黒沢川が自然放流していた原野で、ここには沢水・湧水を導水した素朴な自然村が誕生していた」（同 p 25）とのべている。これはまったくあいまいな表現であり、「黒沢川の自然放流」と「沢水・湧水」の二つの流れを記述しているが、それらが同じものなのか、あるはどのような関係なのか理解をすることは難しい。続いて「これを実証する例として、長尾の城下田圃に面した段丘下に水出という湧水があり、中略、その開削以前段丘下に湧水を取水して飲用・灌漑用に用いたのではなかろうか。」（同 p 25）と述べている。これから判断すると、「沢水・湧水」と言うのは「段丘下に取り水した湧水」のことである。

小穴喜一氏は黒沢川を溢れた水あるいは流れ出した水のことを黒沢川の自然流と称しているように思える。そしてその自然流は扇状地の段丘上を表層水として流れ下ってきて、「段丘下に取り水した湧水」に流れ込んでくることになる。つまり「沢水・湧水」とは「段丘下に取り水した湧水」のことであると理解できる。そして段丘下から東側では黒沢の自然流というごとき川筋の流れはないことになる。結局、用水の源は「段丘下に取り水した湧水」であることが分かる。これは黒沢川とは別物と考えるべきである。

小穴喜一氏が新たに見出した事実は、長尾の段丘下の水出からの「上古の湧水線上」に水路があり、「城下田圃、六反田、柳田地域」を灌漑し、「土師器・須恵器がこの灌漑地域にのみ多数出土」し、「古田がこの範囲のみに続いている」ことである。そしてこの地域において土師器の時代に原始的な水田耕作が行われていたと洞察したことである。黒沢川の自然流とは関わりのないことである。

一方、長尾部落の湧水地点付近には堂原遺跡があり、弥生時代において水田耕作が行われていたことが分かっている。すると当然のことながら、水田耕作は湧水用水路に沿って上流地域から下流地域へ広がっていくと考えられる。つまり弥生時代の堂原遺跡周辺の集落の発展の延長線上に長尾、二木、楡、及木部落地域が開拓されたと考えるのが道理である。これは小穴喜一氏が示した湧水用水路の存在、土師器出土状況、古田の分布地域状況等と整合することであり、合理的に理解できることである。

これは湧水用水路の周辺における原始的な水田耕作のことであり、黒沢川の自然流流域で原始的な農耕が行われていたということではない。結局のところ『三郷村の成り立ち』が主

張する黒沢川の自然流は、どこを流れていたのか不明であり、それによって原始的な水田農耕が行われていたとする根拠も不明である。仮に黒沢川の自然流が流れていたとしても、前述したようにそれは段丘下の用水溝までと考えられる。そこから長尾・二木・楡方面へは流れていたとする根拠はどこにも示されておらず、黒沢の自然流はなかったと考えざるをえない。

小穴喜一氏は原始的な水田農耕が行われていたのは土師器の時代（多分、古墳時代から奈良時代のころを想定していたと推測する）との認識を持っていた。そのため黒沢の自然流はあってもなくても論考の趣旨に大きくは影響しないのである。しかし『三郷村誌Ⅱ』は「4, 5百年の空白の期間」があったとすることを前提としているために、原始的な水田農耕はその後の平安時代に行われたとしている。これは前述したように、小穴喜一氏との食違点である。そしてその頃黒沢川は胴合から沢尻の間付近から長尾、二木、楡、及木方面へ向かって自由に自然流下していたとしている。とすると、その自然流を利用して水田農耕を行うのが道理であるのに、自然流と別に長尾堰や庄野堰の開削を行ったと言っている。これは大きな矛盾である。これは、平安時代のころには黒沢川の自然流は存在していなかったことを示しているのであり、そして「4, 5百年の空白の期間」があったとすることは間違いであることを示している。

以上の考察を整理すると次のようである。原始的な水田農耕は、水出の湧水と扇状地表面を流れる自然流を水源とした用水路に沿った地域において土師器使用の時代に行なわれており、用水路の上流地域から下流地域へ広がったと考えられる。つまり原始的な水田農耕は、弥生時代に始まり、土師器使用の時代にも行なわれており、さらに平安時代の9世紀中頃までの間続いていたと考えられる。結局、三郷村地域は、弥生時代以降から9世紀中頃までの期間において、無人の「4, 5百年の空白の期間」ではなく原始的な水田農耕をする人々が居住していたのである。（添付用水路分布図参照）

#### 5. 4 黒沢川の氾濫の年代とその後

すでに述べたことの繰り返しになるが、土師器とは弥生式土器の系譜を引く古墳時代から奈良時代の頃の土器とされている。その土師器片が地下75cmのところに埋まっており、堆積土壌の状況から見て、黒沢川の氾濫によって埋没したと考えられている。このことは、弥生時代以降の土師器使用の時代においてこの地域に定住していた人々がいたことを示している。当時の土器片が地下75cmという地中深くに埋まっていたことを考えると、恐らく黒沢川の氾濫は相当に大規模なものだったと思われる。

この地域は黒沢川の大氾濫によって壊滅的な被害を受けたのであるが、それでもその後において再び原始的な水田農耕が行われており、また土師器および須恵器を使用する人々が居住していた。この点について小穴喜一氏は、道下遺跡に関連して「おそらく土師器使用時代は自然流・湧水に依存し、その後の氾濫において一時住居は消滅したが、その後再び生活が行われ、かあめが長尾堰の流末としてここに引水されたのではなかろうか」と述べ

ている。

黒沢川の大氾濫の年代は次のように推測することができる。前述したように原始的な水田耕作の時代は弥生時代以降から平安時代の9世紀中頃までの間の時代と考えられる。黒沢川の大氾濫の被害は相当に大きかったと推測されるから、氾濫の被害から立ち直り大きな集落規模に発展するために長い期間が必要だったと思われる。

その立ち直り期間を推測してみると次のようになる。住吉庄中心地域において、氾濫後に生き残り定住を再開した人々が30人だったと仮定してみる。それが1,500人の集落に発展したと考え、それまでに人口増加するための期間を推測してみる。人口増加率を年1%と仮定して計算すると、約400年かかることになる。この立ち直り期間はごく大雑把な推測に過ぎないが、おそらく数百年と考えてよいと思う。

大氾濫が原始的な水田耕作の時代の後期つまり平安時代前期頃に発生したと仮定すると、平安時代前期(9世紀頃)においては、立ち直り期間が不足しており、集落は存在したとしても小さな集落に過ぎなかったと推測される。それでは平福寺や長徳寺を建立した集落は存在し得ないことになり、平福寺・長徳寺建立は不可能である。これは前述の仮定が間違いであることを示している。すると黒沢川の大氾濫は古墳時代の前半の頃に発生したと推測することが合理的と言える。

氾濫後に再定着した人々は地元で定着していた人々ではなく、外部の他の地域からやってきたのではないかとすることも考えられる。そう考えると、再定着した時代がずうっと後の平安時代であったとも考えられる。これについて考えてみる。古墳時代のころの安曇平は原生林に覆われた原野だったとのことである。三郷村の長尾・二木・楡・及木地域は扇状地の中間地帯であり、黒沢川の水は伏流してしまい、自然の流れはなかったと考えられる。その様な不毛とも言える原野の中の三郷村長尾、二木、楡周辺を目指して、だれが移住してきたのだろうか？ 或いは、漠然と新天地を求めて安曇平の中で湧水のある場所を探して歩き廻り、その結果この地を発見し、定住を始めたのだろうか？ 松本地域や穂高地域或いは池田・明科地域に住んでいた人々にとって、それまでに住んでいた場所を離れて不毛の原野へ移住する動機はあったのだろうか？ しかもそれらの人々は数百から千人規模の大集団でなければならない。このように考えると、外部から進出してきたと考えることは全く不合理と言える。

氾濫の起きた頃には居住地域はあちこちに広がっており、大氾濫といえども集落は全滅してしまっただけではなく、わずかではあっても生き残った人々がいたと推測される。また当時においては周辺の山麓沿いに居住していた縄文人たちとの融合はかなり進んでいたであり、その縄文人たちとの融和の結果として誕生した安曇人がいたのである。その安曇人たちがこの地域に再び定着し営々と開拓努力を続けていったと推測する。この推測には明確な根拠はないが、外部から新たに進出してきた人々がいたとするよりも合理的と考えられる。

こうして見て来ると三郷村地域においては弥生時代から、原始的な水田耕作を行い継続し

て定住する人々がいた。そして黒沢川の大氾濫に見舞われながらも、回復し営々と開拓を続ける人々がいたことが理解できる。

ただしその頃の集落址が発掘されていないことから考えると、その規模は小さいものだったと思われる。8世紀頃までは小規模の集落が分散して存在するような状況だったと思われる。そのように小規模ではあっても継続して定住が行われていたのであり、「4、5百年の空白の期間」ではなかったのである。この少数の人々、安曇人たちが住吉庄開拓の原動力となっているのである。

## 6 堰の開削と住吉庄開拓の歴史

### 6. 1 住吉庄開拓における第1段階、原始農耕の始まり

住吉庄地域の開拓においては大量の農業用水を確保することがまず必要であった。そこで用水確保と用水堰の開削に着目して住吉庄地域の開拓経過を考察する。

これまでに見てきたことを整理すると、弥生時代および古墳時代の頃にかけては長尾の段丘下の湧水と自然流を集めた溝程度の用水路があった。それは長尾部落の城下田圃を灌漑し、六反田地籍を通過して二木沢に続き、柳田地籍の用水として利用されていた。その用水路は細々とした流れではあったが、その灌漑地域において原始的な水田農耕が行われていた。その後黒沢川の大氾濫があり、この地域の集落は埋もれてしまった。氾濫のあった時期は古墳時代の前半のころと推測できる。黒沢川の氾濫によって集落は一時的に消滅するが、その後再び人々の定住生活が始まった。これが住吉庄成立前段階の第1段階であり、弥生時代から古墳時代の頃である。

### 6. 2 住吉庄開拓における第2段階、用水路の延長

定住が続き、集落が大きくなり人口が増大するに伴い水田耕作地域拡大の必要性が生じ、それまで用水溝程度であったものを延長していった。小穴喜一氏は明確にしているが、延長された用水路が長尾堰の原型となるものだったのではないかと考えられる。これにより水出の湧水は長尾部落から二木・楡部落を経て及木部落へ至り、道下遺跡付近の「かあめ」まで流れて行ったと推測される。この頃用水路の水源は湧水と自然流であり、水量的に灌漑する範囲に限界はあったが、それでも長尾部落の湧水と自然流を無駄なく利用することができるようになり、灌漑範囲は長尾部落から及木部落まで広がったと推測される。

これは住吉庄成立前段階の第2段階であり、古墳時代から奈良・平安時代にかけての頃である。この段階の特徴は、水出の湧水が用水路を流れてかあめまで通じ、この周辺において原始的な水田耕作が活発に行われるようになったことである。

そして8世紀から9世紀頃には集落規模が大きくなり、人口も相当に増大し、大規模工事を実行するための勢力を蓄積することができたと考えられる。

### 6. 3 住吉庄開拓における第3段階、用水堰の開削

やがて9世紀頃においては黒沢川の大氾濫の被害から立ち直り原始的な水田耕作も広がり人口も増大した。その結果さらなる水田開拓の必要性が生じた。そしてそれまでの湧水用水路は拡幅延長されて初期長尾堰として整備された。ただし、この時点では、水源はそれまでと同様に湧水と自然水であった。当時は、平福寺、長徳寺を建立する前夜でもあり、相当な集落規模に成長していたと考えられる。

一方、この地域の有力な支配者も出現していた。その結果この地域のさらなる拡大発展を目指して、その指導者の下に地域の労働力を動員して、梓川から大量の農業用水を取水する用水堰の開削が行なわれ、周辺灌漑地域の開拓が行われた。

これが第3段階であり、本格的な用水堰の開削の時代である。平安時代のことである。

小穴喜一氏は住吉庄を成立せしめた最初の用水堰は長尾堰だったと述べているが、しかしこれは錯覚である。長尾堰用水路はそれまでの用水路が拡幅・延長されて初期長尾堰用水路となったと推測されるのであるが、この頃の水源は湧水と自然水であった。この頃梓川を水源とする温堰はいまだ開削されておらず、従って長尾堰はそこから大量の梓川水を分岐し受け入れることはできなかった。初期長尾堰は水量不足であり、住吉庄は成立し得なかったのである。小穴喜一氏の論考を注意深く読むと、庄野堰こそが住吉庄成立の基盤となったことが容易に理解できる。

『三郷村誌Ⅱ』は用水堰について小穴喜一氏よりもさらに詳しく記述している。そのなかで、庄野堰よりも以前に横沢堰が開削されたことと述べている。横沢堰は梓川村下立田の一本松地籍で梓川から取水していたとのことであり、庄野堰はこの近くの梓川村下立田一本松と岩岡火打岩の間で梓川から取水していたとのことである。しかし横沢堰の開削経緯および住吉庄のどの地域を灌漑していたのかについては記述していない。

一方、「南安曇郡の耕土の深さ及び用水堰の分布」(『南安曇郡誌(第二巻上付図)』、昭和43年)(添付資料参照)を見ると、庄野堰は梓川から取水し、住吉庄地域のほぼ中央部を流れる主幹線用水路となっていることが明白である。そして横沢堰は庄野堰より少し上流の位置で梓川より取水して、南大妻、藤木方面へ流れていくが、その後は不明である。恐らく、横沢堰による水量では住吉庄全体にとっては全く不十分だったために、庄野堰を開削したのではないかと推測する。結局のところ、住吉庄は庄野堰の開削によって水田耕作地域が画期的に広がり、住吉庄の中心地域の開拓がなされ、荘園としての体裁が整ったと考えられる。小穴喜一氏は「庄野堰開鑿の目的は、長尾堰の用水では届き兼ね、灌漑することのできなかった二木・楡・西及木にかけての耕土七十糎以上の原野を開拓するためであり、その中心部は花園地籍である。中略 この地籍の耕土はもちろん黒沢扇状地より押出した土壌であり、生産力高く住吉庄のウクライナとなったであろうこと想像に難くない。」と述べている。

堰の開削年代について『三郷村誌Ⅱ』は、「鎌倉時代の十二世紀末から開削の始まった立田・横沢・長尾堰が、100年を経て流末まで開発が進んできたことである。流末の開発により、七日市場・一日市場・二木などへ水量補強の必要性が生じ、新堰庄野堰を開削し多くの

原野を田地化したと考える。室町時代初期のことである。」(歴史編 p134)としている。この『三郷村誌Ⅱ』が言う堰の開削年代は遅すぎる。この説に従うと、庄野堰なしには住吉庄の水田は成り立たないのであるから、住吉庄は室町時代に成立したことになる。これは住吉庄成立年代と明らかに矛盾する。

一方、小穴喜一氏は「庄野堰の開鑿時期は、聚落の発生と相対的に見て、平安時代も相当下ったのことで考えたい」としているが、この時代ももっと繰り上げるべきと考える。

住吉庄は梓川から取水する庄野堰開削によってその中心地域が開拓されたということに基づくと、住吉庄が成立した平安時代中期頃(11世紀後半から12世紀前半頃)にはすでに庄野堰は開削されていたと考えるべきである。とすると、庄野堰は平安時代中期前半(11世紀の中頃)において開削工事がなされていたと推測できる。この点については次章で詳しく見ることにする。

住吉庄の用水堰として、その後温堰が開削され梓川から大量の用水を導入するようになり、住吉庄は完成していくのである。そして長尾堰は温堰から引水し、拡幅延長されて住吉庄の主要幹線用水路となる。長尾堰が梓川から取水した水を通水するのは、『三郷村誌Ⅱ』は「鎌倉時代以降であろう」(同歴史編 p120)としている。そして天正元年(1573年)には取水口を広げ水量補強を行ったとしている。

#### 6. 4 住吉庄開拓における第4段階、天皇家への寄進

11世紀頃には日本全国各地で、在地の有力者は新たに開拓した土地を天皇・皇族・有力貴族に寄進して荘園となすようになった。これは寄進地系荘園といわれるもので、国司からの圧力に対抗するための手段だったようである。荘園領主は天皇・皇族・有力貴族等とするが、在地の開拓者は荘官となり実質的な荘園管理権を持っていた。こうするとその荘園は国司の支配を受けないために、遠くの都にいる領主に年貢を納めておけば、在地の荘官は自分の裁量で荘園を支配することができた。

住吉庄はこうした寄進地系荘園である。すでに見てきたように、11世紀後半から12世紀前半にかけての頃に後白河天皇に寄進されて、住吉庄として成立した。

住吉庄地域を開拓し、天皇家へ寄進した在地領主は西牧氏であると考えられている。この点については後述する。

#### 7 三角原遺跡発掘情報による庄野堰と長尾堰の開削年代

三角原遺跡の発掘調査は平成15、16年に長野県埋蔵文化財センターによって行われた。その報告書『安曇野農業水利事業あずみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書』(2005. 3)によると、三角原遺跡は三郷村の住吉神社の西側にあり、9世紀後半から11世紀前半に亘る集落遺跡で、9世紀の住居址も数多く出土しているとのことである。この遺跡で注目されることは、集落の活動時期は9世紀頃と11世紀頃であり、その間の10世紀頃は空白になっていることである。報告書によると、この地域の開発のために松本地域などの近隣地域

から入植して集落を形成したのではないかと考えられている。しかしその根拠は不明であり、具体的にどこで、なにを開発したのかについては記述していない。

9世紀から11世紀にかけての頃住吉庄地域に居住する人々にとって最も必要なものは、大量の灌漑用水であり、その用水堰であった。つまりこの頃においては大掛かりな開発テーマとしては、用水堰開削以外にはあり得なかったのである。こうしてみると、三角原遺跡集落の目的は用水堰の開削にあったと推測できる。

長尾堰は9～11世紀の頃には湧水と自然流を水源としており、住吉庄に十分な量の用水を供給することはできなかったのである。庄野堰は梓川から引水しており、大量の用水を供給することができた。これによって住吉庄は大量の灌漑用水を得ることができたのである。

前節において庄野堰の開削は11世紀の中頃と推測したのであるが、それは三角原遺跡集落の後期活動時期と重なる。つまり、11世紀中頃において三角原遺跡集落は、庄野堰の開削とその灌漑地域の開拓に取り組んでいたと推測できるのである。

そうすると9世紀頃の三角原遺跡集落の目的もやはり用水堰開削にあったと類推して良いと考える。弥生時代に定着した人々がその後営々と開拓し続けた結果、地域人口が増大し、それまでの用水路程度では不足するようになったと思われる。湧水と自然流を無駄なく利用し、さらに広い範囲にまで行きわたらせるために、それまでの用水路を拡張しさらに延長することが最大の関心事となったと思われる。そうして、それまでの原始的な用水路は拡張延長された。それが初期の長尾堰ではないかと推測する。

また三角原遺跡集落は、長期にわたって定住する集落ではなく、開発工事のための一時的な集落だったと思える。つまり、三角原遺跡集落が位置する場所は庄野堰が開削されたとしても灌漑用水の到達しない位置であり、水田耕作することはできない地域である。『三郷村誌Ⅱ』は「西山からの沢水」（同歴史編 p64）があったとしているが、それはどこにあったのか不明である。さらにこの場所は黒沢川の流末に位置し、洪水が起こると直ちに埋没してしまう場所である。ここは子々孫々に亘って永住するには不適當な場所である。つまり、堰開削工事のための一時的な住居地と考えられる。

このように考えると、三角原遺跡集落の目的と活動期間が合理的に説明でき、さらに住吉庄成立時期と用水堰開削の時期との整合性もとれるのである。

## 8 堰の開削者

### 8.1 外部からきて開拓することは困難

「4, 5百年間の空白の期間」説によると、9世紀後半（平安時代前期頃）に三郷村地域を開拓したのは松本などの周辺地域の有力者だったという。つまり、周辺の有力者が開拓するために進出してきたというのである。

しかしこの見解は大いに疑問である。この説によると、この地域は原生林であり、扇状地の中腹にあり、しかも河川のない不毛の地だった。用水堰を開削しなければ開拓するこ

とのできない地域だったのである。そのような辺境の地域に松本などの遠くから出張ってきて開発したと考えることは困難である。その魅力はなにもないのである。

長尾堰や庄野堰開拓は長期的かつ大規模なプロジェクトであり、容易なことでは実行できない大事業である。庄野堰の場合はまず梓川から引水し、原生林を切り開いて堰を通し、そして原生林を切り開いて田圃を作るという壮大な開発行為である。それには膨大な資金と労働力そして長年月の期間を必要とする。

『三郷村誌Ⅱ』（歴史編 p65）はこの頃国府（松本市）周辺で「富豪の輩」と呼ばれる有力者が現れており、彼等が開発領主として乗り出したことも考えられると述べている。しかし松本に有力者が存在したとしても、奈良井川と梓川という大きな川を二つも越えた遠くでの、生活用水や農業用水もない原生林に分け入って、長期間のあいだ用水堰開削を行いそして水田開拓をすることなどまず考えられない。また庄野堰の梓川引水地点は、当時すでに古幡牧があり西牧氏および大妻氏が拠っていたところである。それを無視して松本から進出することなどあり得ないことである。

この頃松本の国府周辺には辛犬甘氏が定住して、大きな勢力を張っていたことが知られている。一志茂樹氏は「信濃上代の一有力氏族—犬甘氏について—」なる論考を『信濃（第3巻、第5,6号、昭和26年）』に掲載している。それによると、『和名類聚鈔』に信濃国筑摩郡には良田、崇賀、辛犬、錦服、山家、大井の6郷があったと記されており、古代において辛犬郷が存在していたことがわかる。また三代実録の仁和元年（885年）の条に、「信濃国筑摩郡人辛犬甘秋子」が起こした訴訟事件に関する記述があり、このころ辛犬甘氏が存在し、百姓ではあったが相当な勢力を保有していたことがわかる。この辛犬甘氏は、その後島内村に進出しており、穂高神社との関連もできているが、それより西へは進出していない。「富豪の輩」が辛犬甘氏であるかどうかは全く不明であるが、相当に有力な辛犬甘氏であっても島内村までしか進出しなかったと理解することができるのであり、三郷村地域にまで進出していったとは考えがたいことである。

## 8. 2 堰の開削者と古幡牧の成立年代

平安時代前期の頃には、すでに三郷村地域に多くの住民が居住していたということは、これまでに見てきた。つまり堰の開削工事をおこなうための労働力調達の基盤はできていた。ここではそれらの住民を動員して用水堰の開削に取り組んだ主導者、すなわちこの地域の支配者について考える。

西牧氏が住吉庄地域の在地領主であったと考えられている。問題は、西牧氏はいつの時代にこの地域に定着したかということである。古幡牧は梓村・小倉村・安曇村一帯の地域にあり、『三郷村誌Ⅱ』は「八世紀末から九世紀初めころ、この地に国牧として存在したと思われる古幡牧へ、後述するように、鎌倉時代初期に東信から滋野氏が来郷したのであらう。そして、中略、西牧を名乗ったものと思われる」（歴史編 p82）と述べている。そして、西牧氏が平安時代中ごろに来郷したとする説と鎌倉時代初期に来郷したとする説を紹介し

た上で、鎌倉時代初期に来郷して、立田堰を開削したと述べている（歴史編 p133）。この説によると西牧氏は住吉庄が成立した後の時代に、古幡牧へやってきたことになる。とすると、庄野堰を開削し住吉庄を開拓した在地開拓領主が西牧氏以外に別の有力者がいたことになる。そして西牧氏はその在地開拓領主を征服し、支配したことになる。西牧氏がそこからやってきて、地元の開拓領主を征服してしまったというのである。このようなことは、明確な根拠がない限り考え難いことである。

西牧氏は滋野氏の支族であり、もともと東信濃地方で牧経営を手がけていた氏族の流れである。8世紀末から9世紀初めころの古幡牧設立当初から関わり合っていたと考える方が道理である。

一志茂樹氏は西牧氏の来郷は、古幡牧成立のころすなわち8世紀頃を想定していたと思われ、「住吉庄の成立過程」において次のように述べている。「本庄（住吉庄のこと）の成立以前にこの地域の開拓に着手していたであろうと想像される古幡牧の牧官西牧氏に出て、本庄の大妻郷に拠った大妻氏があり、その兼澄は承久の変（筆者注 1221年）において官方に属し、東軍と美濃の大井戸に迎戦しているが、相当の勢力を蓄えていたことが想定される」とし、西牧氏が古くからこの地にいたと推測している。

そして西牧氏が住吉庄成立に関与した事情として次のように述べている。「住吉庄の場合にあっては、小穴喜一氏がその所論の中で明らかにされているように、用水堰なくしては、極めてわづかの自然聚落しか存在し得ず、引水は梓川上流の梓村地方からでなくては得られない環境にあり、しかもそこには古幡牧がすでに存在し、滋野氏に出自をもつ西牧氏が牧官として拠っていたのであるから、それらの環境的考察と対応せしめて住吉庄の成立過程をうかがふことが必要である」。さらに「牧官西牧氏の本拠である梓村の地域は、その支族大妻氏の拠った倭村地方と共に、住吉庄に引水している用水堰の取入口を占めている事実を顧みるとき、西牧氏との関係を前提条件としなくては、この荘園の成立の不可能であることは直ちに了解できよう」とも述べている。また「（上長尾の）平福寺にもと讃岐守憲兼が大旦那として寄進した永享三年三月（1431年）在銘の鏝口があったことは、憲兼が明らかに西牧氏と見られることから、小笠原氏が地頭職を有していたにもかかわらず、住吉庄中心地域がなほ、西牧氏の勢力範囲に入っていたことを物語っている」と述べている。さらにこれらのことから、「温・明盛両村にわたる住吉庄の中心地域は、早く西牧氏によって開拓が進められていたであろうことと、西牧氏が皇室にそれらの不輸租地を寄進することによって住吉庄が成立したのではないか」とし、従って住吉庄の範囲は、「最初から南安曇郡南半全域に及ぶいわゆる18郷の地域に及んでいたのではなく、その成立後、経済力の投資によって、荒野に導水し、漸次荘園地域を広げ」ていったと考えている。そうして、西牧氏ないし大妻氏が住吉庄成立の主導的役割を果たしたと考えた。一志茂樹氏のこれらの歴史考証は充分説得力ある合理的なものである。

## 9 住吉庄の範囲と経済的中心地

小穴喜一氏は「明盛村七日市場、一日市場両部落は二木部落と深い関係をもって発生している点より見て、この両部落は庄野堰の開鑿によって生まれた聚落」と述べている。

一志茂樹氏は住吉庄の政治的中心地ははじめの頃は温村上長尾部落と推測し、その後は政治・経済的中心地は一日市場地域に移ったと推測し、次のように述べている。

七日市場、一日市場、六日市場は中世までは二木部落の中に含まれていたが、江戸時代になって分離した。一日市場は宿駅の形態を正しく残している。南安曇郡で定日を冠した市場名を持っているところはこの3箇所だけである。定日を冠した市場は、月に3回の開場があったことを意味している。戦国期には月に6回に増えているところが多い。すると定日を冠した市場は中世前期ころに興ったと推測することができる。これらの市は地方の勢力者が一貫の経済施策として運営しているところに勃興の契機をもっているものが多く、他の荘園的勢力圏と連鎖的に経営していたようである。隣接する場所に3つもの市場が存在していたことは、当時の住吉庄の経済力の大きさを示しているといえる。室町時代から戦国時代にかけて住吉庄の地頭は小笠原氏であり、その代官と思われる二木氏は早くから一日市場に居館するに至ったことは、漸次政治的中心地がここに移ってきたことを示唆している。また3市場は、住吉庄の交通路から見て住吉庄の中心的位置にあり（寺所に馬尻、上長尾と中萱に馬ノ口があり、これらは駅尻・駅口と考えられ、駅があったことが推測できる）、庄野堰が通ずるようになってから急激に発展し、経済的中心地となったと考えられるとしている。

## 10 住吉神社の縁起

一志茂樹氏は「住吉庄の成立過程」の中で住吉神社に関して次のように考察している。住吉庄の政所は上長尾であり、その近くに平福寺があるがそれとの関係は不明である。住吉神社が「西の山々を背に負ふて東面して鎮座している姿は、その前面に展開している住吉庄18郷の総社たるに相応しい位置」であり、住吉庄成立後に勧請奉祀したようにもみえるが、「住吉庄が「住吉」の呼称を冠している事実に顧みるとき、少なくとも住吉神社の存在はこれに先行すると考へねばならず、住吉庄の開拓以前の自然集落に祀られた姿を想見したい」としている。つまり、住吉庄地域が開発され始めたころに、住吉神社は祀られたというのである。

そして住吉神社の背後にある小倉村・三田村とは古来何等の関係もなく、また神社のある位置は黒沢の遷急点であることから、「楡・及木・二木・上下長尾等の諸部落を水害から守る水神として勧請された姿を看取せしめる」と指摘している。

さらに、住吉神社の奥社は烏川沿いの岩原山の住吉平（宮の平ともいう）にあり、烏川を治める位置にあるといってもよく、住吉神社の場合と同環境に祀られた観がある。そして「烏川に縁故をもつ奥社が古く、それに導かれて温村の住吉神社が出現したものとみたい」との見解を示している。

住吉神社に関する一志茂樹氏の考察は非常に興味深いものであり、恐らく的を射た見解であると考えられる。弥生時代から古墳時代の土師器を使用する時代に、黒沢川はたびたび氾濫することがあり、時には大氾濫を起こすこともあったと思われる。そのような状況の中で、水出からの湧水用水路沿いで原始的な水田耕作を営んでいた人々にとっては、黒沢川の氾濫が自分たちの水田を犯さないことを祈ったと推測される。黒沢川が暴れ川であった時代に黒沢川の氾濫から守るための鎮守神を祀るとすると、住吉神社の位置が最適の場所となるのである。そこで、当時岩原山の住吉平に祭られていた烏川治水の神を、この地に祀ったというのである。

一志茂樹氏によると、及木部落には蛇の宮と俗称されている日吉神社があり、また梓村杏部落の氏神は同様に日吉神社である。皇室御領には日吉神社等の神社を勧請して祭っている例が多い。日吉神社は長尾堰の上流と下流に鎮座し祀られている点は、住吉庄の守護神として配祀されたように考えられる。一方住吉神社は住吉庄の地主神として祀られている。

また楡の住吉神社は江戸時代には五大社明神と称していたとのことであり、及木の氏神である五社の祭神は住吉神社と同じだったとのことである。この情報に基づくと、江戸時代において住吉神社は住吉三神（表筒男命、中筒男命、底筒男命）を祭っていなかったことになり、撰津の住吉神社とは無関係であったということになる。そしてその後、撰津の住吉神社と縁を結ぶことによって、住吉三神を奉祀して現在の住吉神社に変わったのではないかと思われる。ただしこの辺の事情は何の記録もないのであいまいな話である。

## 11 諏訪下社、穂高神社との関係

一志茂樹氏は「住吉庄の成立過程」の中で、三宮穂高社御造宮定日記（文明15年、1483年）、下諏方春秋両宮御造宮帳（文明8年、1476年）、下諏方春宮造宮帳（同）、下宮春宮書冊（天正6年、1578年）を調査して次のように述べている。

住吉庄は穂高神社の所役も受け持っていたが、その負担額は、南安曇郡北部から北安曇郡南部の11郷村のそれに比して少ない。穂高神社との所縁の薄いことが推測できる。しかし、住吉庄の所役は御門屋であり、その役割は低くない。住吉庄と穂高神社は本質的に何かを契機としているように思われる。

住吉庄は諏訪神社との関係では、下社の春宮の所役として4本御柱の肆（し、4番目のこと）を勤仕しており、その地位は穂高神社におけるよりもやや低いといえる。しかし中南信地方では住吉庄のみが勤仕している。また課役負担額は穂高神社の場合よりも著しく重い。これは下社と穂高神社との本質的な契機に関係していることと思われるので述べている。

住吉庄は古くは（文明8年、1476年のころ）穂高神社の所役には応じていたが、諏訪神社のそれには従っていなかったとのことである。また住吉庄開拓の中心であった「大妻氏は、宗家西牧氏と同様に諏訪上社と密接な関係を続けていたのに、住吉庄が属していた地域がすべて諏訪神社下社関係であった」ことを指摘し、その事情を解明しなければならない

いと述べている。

一志茂樹氏のこれらの指摘は住吉庄の誕生の経緯を示している。つまり、住吉庄地域は穂高神社、諏訪神社と関わりなく発展してきて、住吉庄として成立した。その後、まず穂高神社との関係ができ所役を受け持つようになり、さらにその後諏訪神社下社と関係ができ所役を受け持つようになったと推測される。

## 12 まとめ

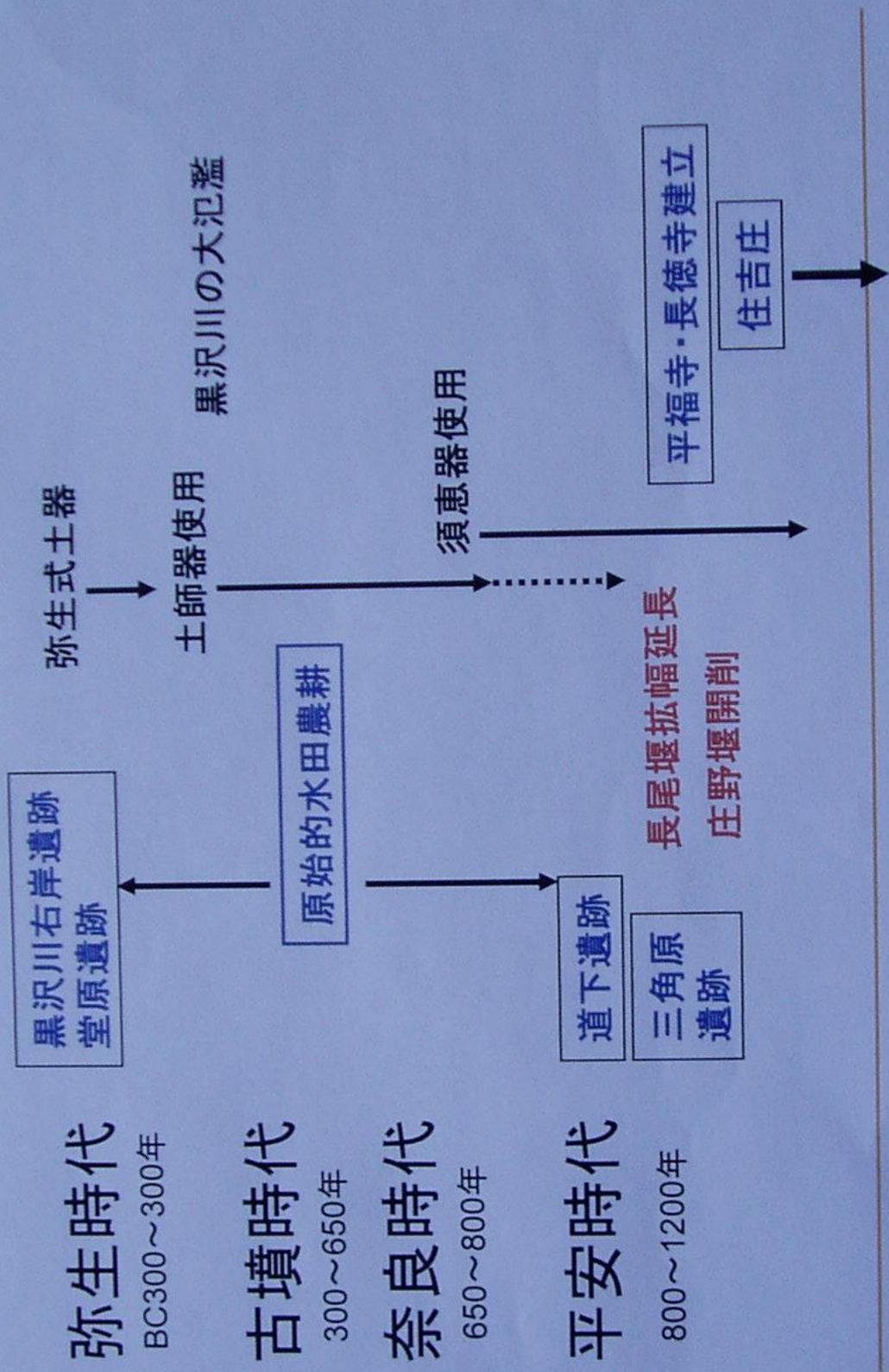
三郷村地域には黒沢川右岸遺跡および堂原遺跡があり、これによって弥生時代中期から後期、つまり紀元前1世紀から4世紀にかけての頃に弥生人・安曇人が居住していたことが分かっている。そして文献史料から平安時代中ごろ、11世紀中頃から12世紀前半にかけての頃に天皇家に寄進されて寄進地系荘園として、住吉庄が成立していたことが分かる。本稿ではこの間の5世紀から11世紀前半頃までの期間がどんな状況だったのか考察してきた。

これまでは、考古学的遺跡・遺物が少ないことから考古学的にはこの地域は空白の状態だったとされていたのである。しかし小穴喜一氏の調査によって、この期間に原始的な水田農耕が行なわれていたことが発見された。この発見は考古学的遺跡発見に匹敵する史実といえる。この史実によりこの期間は住吉庄成立の前段階であり、この地域が開拓されつつあった期間だったことが分かった。つまり、5世紀から11世紀前半までの期間、三郷村地域では原始的な水田耕作が進められ、農村開発が行なわれていたのである。その集落規模はそれほど大きなものではなかったとおもわれるが、継続して安曇人の定住が行われていた。空白の状態ではなかったのである。

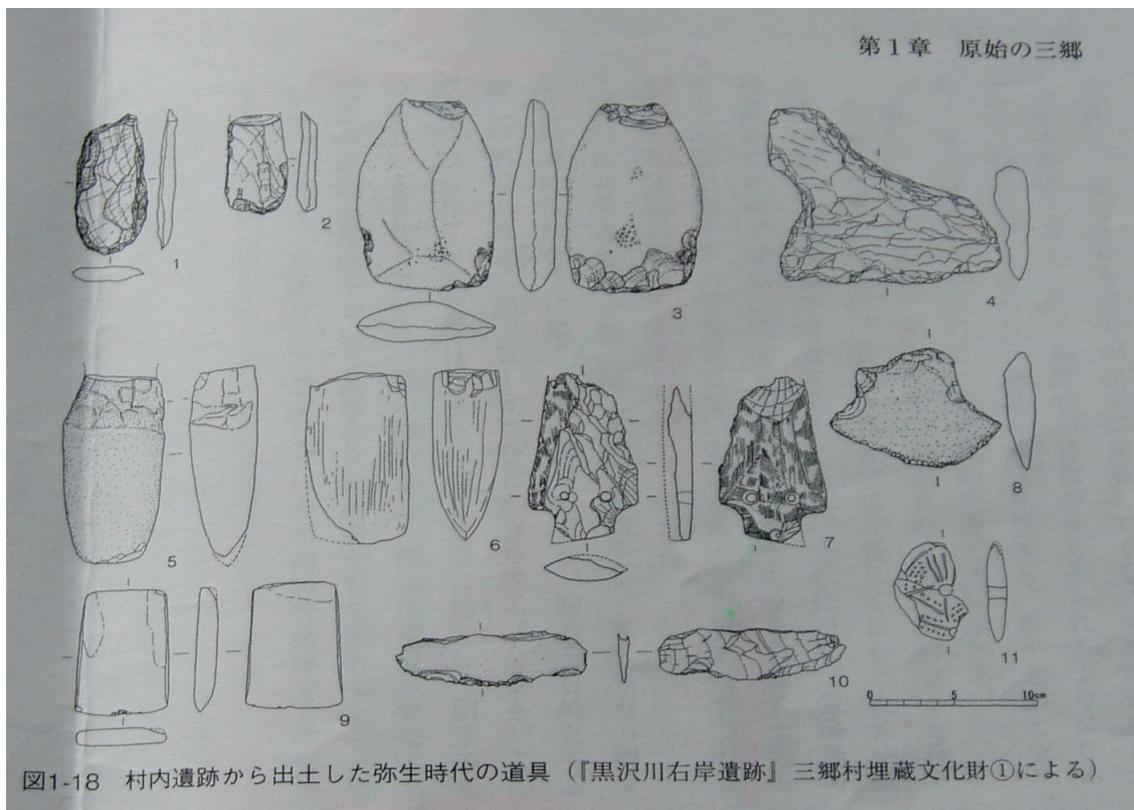
この間の考古学的史料は少ないのであるが、それらからつぎのことが考察できた。弥生時代から古墳時代、奈良時代にかけては、長尾部落に発する湧水用水路に沿った地域において原始的な水田耕作に基づいて開発が進められた。その後平安時代に入った9世紀後半頃に用水路の拡充・延長がなされ初期の長尾堰ができ、広い範囲にわたって開発が進んだ。その結果、平福寺・長徳寺を建立する勢力が出来上がった。さらにその後11世紀中頃、梓川から引水する庄野堰が開削された。その結果住吉庄中心部が広い範囲にわたって水田開発された。そして住吉庄地域は荘園としての体裁が整ったのである。なお、その後においてもこの地域はさらに開発が進められ、用水堰は網の目のごとくに開削され、住吉庄は豊かな水田地帯となった。(添付年代譜参照)

以上

# 三郷村・住吉庄開拓の歴史まとめ



黒沢川右岸遺跡出土品写真（『三郷村誌Ⅱ』より）







『南安曇郡誌』より

